

住民力による地域づくり



民俗研究家 結城 登美雄氏

結城と申します。時間をいただき、話をさせていただきます。私は、この10年間、東北の小さな村、農漁村を歩き回り、とてもたくさんの方のことを学びました。10年前は自分自身も自信がなかったのですが、最近、そこが何か大変良い方向を示してくれている気がします。

会場の方は、郷土による色々な課題の解決や地域づくり、その現状からどう出発するか、どう始めていくかについて、何か手掛かりが欲しいと思われているのではないかと思います。

地域づくりには、こうすれば良いという方程式がなく、時間もかかり、地域ブランドの形成があり、一朝一夕には成り立ちません。しかし、それを議論し、考え、悩みながら進み、その結果として、私たちが期待したい良い地域が見えてくる、あるいは実現していくのかと思います。

ではどうすればいいのか。少し過去を振り返ってみましょう。

日本には、明治維新のとき約6万5000から7万の村がありました。城下町を除けば、日本は小さな村の集まりでした。明治22年に市町村制が施行され、村は1万5000に減りました。

昭和20年になると、少しずつ地方の行政が整備されていきます。昭和33年は、3800ぐらいだと思います。最近、かつて7万あった村が1700ぐらいになろうとしています。

高度経済成長以降は、村を統合して、町や市や政令指定都市になるなど、大きいことを基本にした効率性を求める時代でした。当時の行政が、強化のプロセスにあったとすれば、その強化の裏側で進行したものの、それは、村の人たちが持っていた自治力や地域力、それらを行政に下駄を預けていく過程であったといえます。村の人たちが、全部下駄を預けたわけではありません。いつの間にか、行政依存や外部依存が、でき上がってしまいました。

それを、どう捉え直すか。言うは簡単ですが、大変だという思いがしきりにします。

行政は、自身を一つの主体として、形成してきました。そこに住む住民の主体は、どうやって形成されるのか。我が町、我が村、我が住み暮らすところを、このままではいけない、こうありたい、これを解決したい、と思う人たちの心の中にあるものを、まとめ、解決し実現していくことを、仮に主体としたら、それはどのようにして形成していったら良いのか。

一体、住民に本当にそういう主体や力はあるのか。自治体は、ときに住民を軽んじてきた側面があります。人数は多い方がいいという、そこに住み暮らす人の願いや期待に耳を傾けることなく、数字上の表れだけで、地域の優劣をつけてこなかったか。そう問えば、「そうではなかった」といえる自治体はないはずです。

大きい町や大都市の人には、ここは我が町である、自分がこの町を良くするという当事者としての意識が、大変希薄だと思います。むしろ、「限界集落」や小さな過疎と言われているところの方が、実は当事者にならざるを得ない現実があり、それをしようという動きもあります。ただ、それをどのように力にしていくのかという方法が、なかなか見つからないでいる。それが現実だと思います。

超過疎は、かつて30軒あったところが、今は5軒に減っているところをいいます。役場へ行き、「どうして、今でもあの5軒はあそこに残っているのか」と聞くと、「行くところがないのでしょう」と答える自治体があります。なぜ、5軒の家の人々は、今なおここに暮らし、これからもそこに暮らし続けるというのか。その願いをどう受け止めるのか。そのことを考えないと、新川先生のご指摘も、空論に終わってしまうと思います。

小さな村は人口が少ないので、住民力のようなものを見るのに大変都合が良い場所です。100万都市、仙台では、誰と何を話しても、取り付く島がない。住むところは、なるべく小さい方が良くといっても、小さいものは軽んじられてきました。「大きいことはいいことだ。大は小を兼ねる」という価値観がありました。

誰もが、人口が多いからといって、そこに住む人間が幸せなわけではないと思いながら、人が多いことは良いことだと、大きくする。人口が少ない過疎というのは、不幸な暮らしだとは思わないはずなのに、いつしか私たちは、過疎に対し、持っていたある視点があります。その視点を取り払い、自由な場所に立ち、もう一度地域を、どのように考えていくか。その過程の中にこそ、ブランド形成力が有効になると思います。

例えば、山形県の金山にある谷口集落には「がっこそば」があります。そばなど食べない村から、「校舎が潰れるのはもったいない、どうしたらよいか」と相談を受けました。「どうせ、ユンボで1時間で壊されるのなら、使ってから壊してもらおう」となりました。お母ちゃんたちは「そば打ちをやりたいが、やったことはない」といい、それでは私の友達を紹介しましょうと始まり、10年が経ちました。そこへはたくさんの方々が行き、畑はそば畑になり、製粉までやっています。

36 戸の谷口集落のように、そこに関わる人たちが、それぞれに一つの動きをする例があります。金山にもありますし、5 戸 16 人のバッテリー村もそうです。宮城県丸森町の大張は、300 戸 1000 人です。JA は撤退し、購買も閉鎖し、商店は潰れ、300 世帯 1000 人の村に店一軒なくなった、さあ困ったと言って、集まった共同店があります。

3 年ほど前に、沖縄の離島や小さな山原（ヤンバル）辺りを歩いてきましたが、その知恵に似た、100 年の知恵が、ちゃんと東北の 300 世帯 1000 人の村に受け止められ、7 割の人たちが、自分たちで出資し、今なお、店を経営しています。

また、福島県山都町の宮古は、早くも限界集落になっていましたが、そば屋さんを半分ぐらいの人がやり始め、80 歳近いおじいさんも元気に一生懸命、孫と一緒に店をやっています。権藤さんのお母さんから聞いた、長野のおやき村は、おばあちゃんたちをつなぎ合わせることで、長野オリンピックでは十数億の売り上げになり、おやきが全国区になっています。

その会社は 60 歳入社定年なしという会社です。定年などない、一つの区切りが一つのスタートである、それを引き受ける度量のある地域が、まだまだたくさんあります。

十数年前から権藤さんに、いろいろ教えていただきました。宮城県綾町の人、他人任せではなく、自分たちもこの町の当事者と考えます。道路工事すら、住民が作業をします。アスファルトとローラーなどの道具は、現場監督が出しますが、工事をするのは住民です。どこかのゼネコンに頼れば、規格通りに間違いなく報告書が上がり、完成もするでしょう。しかし、その道路のそばには、個人の家々があるわけです。若い頃には気づかなかった段差が年をとれば壁になる。車椅子になる人たちを、知っているのはその土地の住民です。その土地の住民が作業しながら、あのおばあちゃんのために、ここは緩やかなスロープをつけようと、その地域に暮らす人の目線で道路工事をする。やさしく穏やかに、その土地の人たちのことを考えている。

住民一人ひとりが当事者になり、ここをもっと安心できる素敵な良い場所にしたいのだという思いがなければ、新川先生がおっしゃる明治維新、戦後、それに続く第三の大きな改革は、できないだろうと感じます。

東北開発研究センターの PR のために、私も書いた『持続可能な地域経済の再生』があります。2 章書かせていただきました。まずは、その中の、地域とは何かについて、もう少し議論を深めたいと思います。

地域は空間とも捉えられます。地理学はエリアと言ひ、社会学はコミュニティと答えるでしょう。企業人はマーケットと答えるに違いありません。立場により、地域概念は広いのですが、私は、家族の集まりと定義したいと思います。

地域づくりとは、そこに住み暮らす家族の思い・期待・願い・悩み、それらをそこに暮らす人々と共に、どう解決し、どう実現していくのか、という行為にほかなりません。地

地域づくりのテーマは、「皆になるべく共通するもの」だと思っています。この 10 年間、各土地の 3000 人近いお年寄りたちに、おしゃべりやお茶のみをしながら調査をしました。その結果わかったことは、「地域づくり」のテーマは、おおよそ七つあることです。

そのうちの一つは、「この村に、この町に、良い仕事の場を持ちたい」という地域の側の考え方です。誘致工場を持ってこようということではない。この町にあるもの、この村にあるものを生かし、自分の力を生かし、それを人に評価してもらおう、という考え方です。小さくても良い、それが当てにされ、喜ばれるような仕事。小さくてもその人の力を生かすたくさんの場。その一つが、1991 年から全国に広がった 1 万ヶ所を超える農産物直売所です。硬直化した農政によって、25 パーセントの小規模な自給的農家が、行政の支援を受け、小屋を作り、そこに 1 袋 100 円のものを集め、売る。積みり積みって平均 1 直売所 50 人くらいが参加すれば、1 人あたり 4 万円の売り上げになる。それが 1 年続けば、2400 万円。1 万ヶ所で 2400 億円の売り上げです。これは山形県の全農業生産額に匹敵します。

小さな営みに対する目線を失ってはいなかったか。大は小を本当に兼ねるのか。大が倒れたときの脆さは、視野に入れなくてよいのか。直売所で働く、おじいちゃんおばあちゃんたちが、なぜ生き生きしているのか。「人に喜ばれる仕事、そういう作物を私は届けたい。そして、喜んでもらう場が欲しい」。地域づくりは、お金という物差しで見ってしまう見方ではないと思います。それと同時に、「話し合うこと」が最も私たちができる、お金のかからない方法です。

私が調査する 600 の村へは、アポイントを取らずに行きます。ほとんど闖入者のように朝早くカメラを構え、水管理に来るおじいちゃんの写真を撮り、不審がられます。それでも、仙台から来たというと、孫が、娘が仙台に嫁ぎ、息子が仙台に勤めている、と言います。一方、仙台の人たちは、仙台が東北の小さな村からやってくる人たちに占められているにも関わらず、我がフィールド以外のエリアには、何の関心も持ちません。

私は大学で講師をしておりますが、私の授業は大変人気があります。なぜ人気があるのかは、出席も取らない、試験もしない、レポートも書かせないからです。こちらにも意図があり、どこの出身であるか知りたいから、それさえ書けば点数を与えます。

一番前の席に座る生徒に、「君はどこ出身だい」と聞くと「盛岡です」と答えます。「盛岡のどこだい」と聞くと「もっとこっち……」と言い続け、なかなか答えません。何度も問い続け、ようやく「沢内です」となるわけです。なぜ「沢内で生まれ育ち、仙台の大学に来ました」と言えないのか。今時の学生においてすら、なぜ小さい村は負い目をいつまでも引きずらなければいけないのか。何がそうさせたのか、という思いがします。

村や町の人に話を聞き、相手の仕事を邪魔し、長居をして帰るので、帰る際に「申し訳なかった」と言えば、決まって「またおいで」と言っただけです。そして、最後に必ず「ああ、俺は何年ぶりに、人とゆっくり話をしただろうか」と言います。村にいて町にいて、同じ町に暮らす人とゆっくり話をしない。開いた委員会で一言二言発言することで、町づくりができるものなのでしょうか。普段向かい合うことのない環境から、町のビジョンや

夢が膨らむのでしょうかと思います。

行政の管理統治能力が上がるもう一つの側面には、私たちの「村は煩わしい」という価値観があります。この煩わしさを、私たちが引き受けましょうというのが、管理統治していくときの一つの要因でした。「いや、それはお金に換えましょう。何にかえましょう」と、どこかに委託します。すべて外部化し、何もなくなる。地域とは、煩わしくもあるが、有難きものです。有難きものだけを振りまく幻想に対し、媚びずに煩わしさと付き合っていく。いつ私たちは、そのことを忘れ、下駄を預けてしまったのか。今日、行政に関わる方々は、そういうものをどこかで感じているに違いないと思います。

では、新川先生がご指摘された政治と経済について話します。現代では、地域活性化を、限りなく経済活性化と捉えてきました。最近、文化が変わらざるを得ない事態に直面し、暗中模索し、試行錯誤を繰り返しています。少なくとも「文化の主体」となるものには兵隊のように、あるいは学校のようにABCのランクがついていません。Aが良くてBが駄目だという評価の基準を持ち込むことは、できない場所だと思います。おじいちゃんおばあちゃんたちを、ただ福祉の対象だと呼んでしまうこと。それは、最も避けなければならないことの一つだと思います。

そういう意味で、人の能力を生かす場を懐深く用意することが、大事だと思います。私たちは、そろそろ偏差値で見るような「人材」という呼び名を止めなければなりません。行政の手法も、認識を含め、見直していく必要があるだろうと思います。

若者たちの417万人は、フリーターと言われています。ニートを加えると大変な数だとたくさんの方が憂えています。東京には、「緑のふるさと協力隊」という12年目のNPOがあります。大学を中退・休学し、勤めを辞めた人たちが、一年間、農山村に派遣されます。今年は46人が各地に散りました。

今年は福島の応募が多かったのですが、自治体がそれを理解しないため、倍率が3.5倍に膨み、派遣できない状態です。1年間山林を手入れし、畑を耕し、直売所のレジを打ったり、消防団を支えたり、山村や農村での体験をします。1年間は、月3万の食費と2万円の生活費が支給されるだけなのに、若者たちはいま農山村、漁村に向かおうとしています。

私たちは、都市の風景だけを見て若者たちを判断していないだろうか。私は、大泉さんのいうブランドの中で、小さな力、小さなものの評価をやっていけないかと思っています。

これは宮城県宮崎町（現加美町 宮崎地区）です。ここの男たちは「俺たちの村には何も無い」とぼやき続け、何もしてきませんでした。彼らは「俺たちの町は6400人。コンビニ1つない。いまだき、日本にコンビニ1つない自治体があるだろうか」というので、「それで解決するなら、コンビニを作ればいいじゃないか」となりました。どの家も、自分の食

べるものに、大きなスーパーのものはありません。食堂も 2~3 軒くらいしかありません。28 の村の集まりです。宮城県内の人ですら「宮崎町は、どこにあるんだ」と知らないのが当たり前です。

しかし、この人たちは、自給の畑を持っています。そこで年間約 50 種類の野菜を作り、多く採れば保存・加工し、それを食卓に出します。しかし、この国では、自分で育てた食べ物を評価する仕組みや価値観がありません。市場を経由し、お金という物差しに評価されなければ、何もないということになってしまいます。どこかの大学を出れば良く、出なければ駄目だというのに似て、評価の物差しは歪んでしまいました。

おばあちゃんが食事を作っています。20 歳でお嫁に来て、90 歳の今も家族のための食事を作っています。行政の人は、このおばあちゃんをどのように見るのか。私は、もうこのおばちゃんと 6 年間、話をしています。

3 年前おばあちゃんに「1 日に 3 回飯を作って、一年毎日やると家族 6 人のために 365 日 1095 回の飯だな」と言うと、「そんなに作るかい」と驚きます。そしておばあちゃんは、「時々手抜きもした」と言うので、「では 1000 回か」と言うと、「まあ 1000 回は作ったろう」と言います。365 日 1000 回、家族のために 6 人分作りました。平均で 12 人のときや 7 人のときもあったそうです。70 年間作り続けると 7 万回の食事を作るということです。その 7 万回の食事、どのくらいの価値があるかはわかりませんが、外食に換算してみようということになりました。

4 人家族として 1 人 500 円の請求です。「請求書を書け」と言いました。「家族の皆様、私は 20 歳から 90 歳まで飯を作ってまいりました。1 食 500 円と換算し、4 人で掛けると、2000 円です。2000 円に 7 万回かけると、1 億 4000 万。洗濯代・掃除代は入っておりません」と、但し書きもした方がいいと言いました。この 90 歳のおばあちゃんをどういう目でとらえるのか、もう一度考えるべきだと思います。

お茶菓子や漬物を持って集まってくる。どれもうまいわけです。そのうまいものを特産品にすれば、金になるとあおった通産省（現、経済産業省）地方商工関連の考え方、それも大事だと思います。しかし、もう一つ大事なものがあります。商品化されれば、失われてしまう食べ物のおいしさです。

漬物は発酵食品です。どこかで発酵を止めなければ、もちません。しかし、冬桶から出した白菜をしぼって、まな板で切って出した漬物、このおいしさはどこにも届きません。家庭の中に眠っている、つくたての餅は、商品として食べる場がない。

地域の文化には、「商品化される前のもの」と「商品化できない値打ち」があります。持ち寄る力。これも地域をつくっていく一つの力だと思います。持ち寄る力が集まると、形が見えてきます。力が見えてきます。

ご飯だけでも 80 種類ぐらい。NHK 今日の料理で勉強した左側下のお母さんの自慢のおむすびです。右は 70 歳過ぎのおばあちゃんの味噌おにぎりです。藁を置いてあるのはくっつかないようにするためだそうで、話が盛り上がります。それが集まると 800 食です。2 年目には 1300 食になりました。

今年で 6 年経ちました。すると不思議なことが起きます。普段の何でもないものを、7 万回の食事の 1 回分を持ち寄るだけで、たくさんの人が繋がります。

持ってきた女の人自身が、「オレらの村は、てえしたもんだ。オレらのオナゴは、てえしたもんだ」と言います。そういうところに 1 万の人がやって来ます。食べ物というのは、不思議な力があり、それを間に挟み、知らないもの同士がおしゃべりを始めます。これはみりんがきいている、隠し味は何ですかなどと、食べ物の中に家族の物語があるからか、延々と 1~2 時間も、あちこちにおしゃべりの輪が広がります。

私は、1 日として欠かせない生活行為の一つを持ち寄ることで、「ゆっくり話をすることもなくなった」という人を減らすことできないだろうかと思います。ひとりでも家族という時代を迎え、この町にも 1 人暮らしの老人がかなり増えました。私が知っている限りでは、やはり 1 人で食べるのは寂しいというのが本音のようでした。

そこで彼女たちは、5 万回、7 万回の食事を作れるなら、私たちが土曜日曜だけでも作りましょう、とトライアルを始めました。トライアルは、100 食分ですが、歴史民俗資料館で行われました。

昔はこういう道具を作って苦労したものです。残念ながら、その多くはゴミをかぶり、見に来る若者たちは、何のことやら分からなくなっています。それを、一時片付けて掃除をし、水道がないので、お母さんたちに工夫してもらい、あんこ餅・納豆餅・つゆ餅・雑煮餅、ナメタなどを用意してもらいました。

値段について「オレは 2000 円ぐらいがええな」と言うと「そんなん取れんよ」とお母ちゃんたちは反対します。最後「いや、1500 円」とオークションは上がりますが、地域の人たちは、自分たちの文化や力に対して、その価値を下げていきます。なんとか決まった値段が 1000 円です。それで、宣伝も何もしませんが、祭りのときにちょっと PR しただけで、たちまち 100 食が 10 分で売り切れてしまいました。

売り切れたとたんお母ちゃんたちは「2000 円にしておけば良かった」と言いました。その 1000 円を 2000 円にする力。役場の皆さん、地域に関わる皆さん、その値打ちについて受け止めてもらいたいのです。しかし、過剰に一気に 2000 円ではなく、1000 円ではなく 1200 円、1500 円から、オークションのように地域の値打ちを競っていただきたいと思いません。

これからの社会は家族の形が大きく変わり、1 人でも家族です。老人 1 人世帯、高齢化社会といろいろあります。かつては、家族が 10 人もいれば 1 人が倒れても、誰かが介護に専従することができました。家族 2~3 人であれば、公共に頼らざるを得ない。しかしそれも

限界に来ているのであれば、地域の皆が支え合うしかない。ここにあるものを、ここに
いる人たちが生かし、ここに生きる人たちの食卓、食堂、台所のようなものを作ることは
できないか。そうすることが地域の安心になり、皆のおしゃべりの場所になることはでき
ないか。お母さんたちによって、そのようなことが、話されて準備されていきます。そう
いう動きに対して、目を凝らしていただきたいです。

制度や予算、行政の手法だけでは、ここにおける成果はリレーできないことをお考え
いただきたいと思います。

1人のおばあちゃんが作る7万回の食事、1億4000万円の食事です。地域とは1人1億
円くらいの食べ物を生み出す力です。畑を耕し、種をまき、そして育ててきた人たちの力
です。それが100軒あれば100億円、300軒あれば300億円です。それらは、使われてい
ない地方の公共設備のようです。

食育基本法は、この4月に衆議院を通り、6月には参議院を通るでしょう。7月か8月か
ら武部幹事長や小泉首相は、国民運動だと言うことでしょう。食育基本法に先んじて、私
は、県庁の職員から、相談を受けました。場所はどこかと尋ねたら、「古川か石巻か気仙沼
か角田か塩釜」と言われました。「産業や社会の勉強ならいいですが、もっと小さな暮らし
の場所でやりたい。北上町はいかがですか」と言ったら、7人全員が「あそこはなににも
ないでしょう」と言いました。

私は「北上川があり、海があり、太平洋があり、おばあちゃん、おかあちゃんたちの畑
がある。ご馳走は、次々にやってくる。フノリ、マツモ、ワカメ。山があり、海があり、
川があり、野があり、畑があり、田んぼがある。お金はないが、安心して子育てができる
場所だ」と言いました。

エンゲル係数は22パーセント、子育て費用は支出の3割に達しています。今どこに安心
して子育てができるところがあるのでしょうか。1ヶ月そこの13人のお母さんたちに何を
育てるかアンケートを取りました。畑、海、山菜、果樹、木の実。また北上町のお母さん
たちも3軒がさくらんぼを育てていました。その数、きのこや魚120種、合わせて350種
類です。その350種類のリストを持って県庁に行きました。なにもおっしゃいませんでした。
お任せしますといわれるので、やらせていただきました。商品としての売り物は、こ
こは唯一、しじみとワカメだけです。お金になるものがない。それが地域の評価にならぬ
ように心がけたいものです。

北上町は家族の集まり、それが村をなしている。そこに生産と生活があります。都市は、
生産と生活を企業というところでやりますが、北上町は自然を相手にやっています。

自然は山・海・川・野・畑、食べ物が生まれる場所です。宮城県をコンパクトにすると、
北上町になります。北上町を大きくすると、日本になります。頼りは13人のおばあちゃん
です。

食育にも三つ必要です。教師・テキスト・教室です。教師は7万回の食事や5万回の食事を作ってきたおばあちゃんです。その人たちが精進料理を作ります。それを子どもたちが味わいます。教室は、海・山・川という自然です。そこからとれる食材がテキストです。350種類のテキスト。学んでも、学んでもきりが無いほどのたくさんのテキストです。

それを育て、食事にし、加工する知恵者がたくさんいます。そういう場所が、良い学びの場になります。それをクイズにして、私が授業をやりました。3人のお母さんやおばあちゃんが、大根を輪切り・千切りし、クイズをやります。1本の大根を30種類に切り分ける力。味がすべて違います。調理によって切り分けていきます。その手さばきを目の前で見せられて子供たちは「このばあさんたち、ただ者ではない」と言うわけです。

それを、面白いという見方をするのが、公共放送のNHKです。全国中継3時間半で、何を展示しているのか分からない13人のお母さんたちに、「今あるものをちょっと台所や納屋や畑から持ってきてもらえないか」と言うと、13人のお母さんやおばあさんが、我が家にあるものを集め始めました。150種類ありました。コンビニもスーパーもデパ地下もいないわけです。それをなぜ、デパ地下がある町が良い町で、ない町は駄目だと言ってしまったのか。そして、なぜ、そう信じてきてしまったのか。そのことが少しずつ今、問われているように思います。

そして、この北上町でも同じように、人が集まれば人数分の食事を持ち寄り、小皿に取っては隣に渡す「取り回し料理」という地域の食卓が生きていきました。

3年前から沖縄を調査しています。少子高齢化社会、日本はどうするなど、私にも相談があり、沖縄へ調査に行き、国内調査で初めて通訳がつかえました。104歳のイレイカマドさんをはじめ、90歳以上のおじい、おばあ50人に話を聞きました。3週間の調査です。おじい、おばあは、5つを挙げていました。報告もその5つにしました。1番目、アタイ。2番目、ユンタク。3番目、ユイマール。4番目、共同店。5番目、テーゲー。

アタイとは自分の家の周りに自給のための菜園を持つ、辺りほとりの「あたり」で、それをアタイと言います。大体この人も96歳くらいです。100歳のおばあたちが鎌を持って仕事に出かける後ろ姿ほど、素敵なものはないと感じました。そのアタイ、家族の食事は、宮崎町や北上町に通じるものです。

アタイでおいしいものがとれるから、「食べ物で長生きの秘訣でしょうね」と疑い深く何度も聞くと、「まあ、それもあるかな」と言いました。「食べ物は何ですか」と問えば、おばあたちは「食べ物はヌチグスイである」と答えます。ヌチとは命ということです。グスイは薬という意味です。「食べ物は命の薬である」という哲学を持っています。

安全だ、安心だというような抽象ではありません。有機だ、無農薬だというようなことでもありません。食べるとは何か、食べ物とは何かという哲学を持っています。それを持

たず、餌のように、ただあさるだけの本土の人で良いのか、と問われているような気がしました。「ヌチグスイのクスイと言っても、サプリメントじゃないぞ」と言われたわけです。

アタイは、様々なところにあります。食べ切れなかったが、お裾分けとなって現われる場所を市と言い、屋根のあるところを直売所と言っています。50人中48人がアタイを持っていました。そういう繋がりがあるわけです。

お米に関しては、柳田国男氏の南島論もあるようですが、ここは、いくら調べても石灰岩質や水がなく、稲はここを通じて伝わったが、稲作文化は十分に定着できなかったように思いました。しかし、95歳のおじいは苗を作り、作物を作ります。それはつまり「ヌチグスイ」、食べ物の命の薬であるならば、それを他人に委ね、有機だ、無農薬だ、添加物は入らないかなどと疑うのは、みっともないではないか、ということだと思いました。

日本国の自給率40パーセントはどうするのか。食料、農業、農村の基本計画見直し、自給率アップの10年先送りなどということは、いくらでも言うことができます。自給率、東京で1パーセント、大阪で2パーセント、神奈川で3パーセントという現実があるなら、幾分揶揄的に言いますが、東北は100パーセント以上です。この東北が、もっと自分たちの営みに対し、自分たちの産出する食べ物に対し、むらなく丁寧に評価する自負を持ち、食を調理・加工し、楽しい食の場になる食文化として仕立て上げる共同のプロジェクトを持つべきだと思います。目先の利益で、一喜一憂することがなければいいと思います。しかし、現実にはあります。なぜ、東北は食料供給基地という、誰が決めたか分からないことに、へりくだるのでしょうか。

104歳、さすがに風格があります。嫁は78歳です。沖縄は台風に備えて、必ず家の構造が1段低いのですが、両サイドに縁側があります。ここで毎朝行われている集まりのことをユンタクと言います。ユンタクとは、お茶のみでありおしゃべりの場です。

朝6時、夏ならば5時、集落25軒であれば、25軒がそれぞれに歯を磨きながら、この場に「おはよう」と集まってきて、沖縄茶を入れ、お茶菓子の黒糖を食べます。話すこと30分~1時間に及びますが、「鎌の柄が、ちょっとぐらついちゃった」と持ってくれば、「わしが直してやる」とおじいが引き取ってくれるし、キャベツの苗が不足していると言えば、「オレのが余っているから、あげよう」となり、「このごろ、あのおばあいないけど、どうした」と言えば、「那覇までひ孫の顔見に行って、あさって帰る」と、今日1日と今週のたいていのものが間に合います。それが、そこに住む住民のお互いの叡智であり、技術であり、経験です。東北の人々は、いつそれを失ってしまったのか、下駄を預けてしまったのか。

そして、3番目がユイマールです。ユイマールは共同作業、労働効果というように、田植えも稲刈りもかつてはそうでした。小さく力のない、あえて言うならば、江戸時代中期の「結」(ゆい)といえます。豪族が支配しているときは結は生まれません。小農たちが集ま

った村になったときに、効率を考え、お互いを支え合う結という考えが生じます。

行政が張り切っているときは、結は生まれません。行政が崩れかかったり、為政者が崩れかかったり、企業が崩れかかると、自分たちでお互いに支え合う結という考えが発生します。

10年前、僕が回る東北の村で、NPOが出てきたとき、山奥のおじいさん、おばあさんも「役場でNPOと言うのだけど、よくわかんねから、勉強しねえとなんねえな」と言うので、「勉強なんかすることねえや。それは結（ゆい）のことだろ。お互いさんということだよ」と言いました。そしたら、じいさんもおばあさんも「それは大事なことだ」と言いました。

NPOというよりも、山のおじいさんおばあさんは、「NPOは結なり」というと、「それは大事だ。オラもなんとかしなきゃねえ」と言います。あるいは、それが村を支えてきた、お互い様の精神であると思います。中心には、自分の暮らしを自分で支える自給という力があり、足りないところを補う、共同の相互扶助である結があります。市場経済は、その周りを補うという形でした。しかし、この30年の間に自給はゼロになり、相互扶助は風船のようにしぼみ、市場経済に翻弄される、そんな地域にしてしまいました。

人間はものを作れます。楽しくものを作る力を持っています。取り戻す力を持っています。しぼんでしまった自給の力、やつれてしまった共同の力を、もう一度市場経済から取り戻していくこと。まだまだ作業はいっぱいあります。

身についた習慣、当たり前のようにやっているものを文化といいます。文化基金がなくなると、文化行為が終わるというわけではありません。筋が通っています。沖縄には、店が1軒もない離島が17あります。

ただ一つ、明治39年発祥で今年100年目を迎える、皆が出資でやってきた共同店があります。皆が必要とするものを仕入れる、農協と生協と漁協と森林組合が合わさったような共同店です。

売っているものは、スリッパやサンダルなどの生活必需品です。ここを經由して売の場合は、15パーセントの手数料が、店に入ります。オリオンビールは230円。定価で売ります。大手スーパーは、チラシなどで198円とありますが、「たけえビールがうまい」と言って、おじいやおばあは、それを飲んでいきます。

明治のころ、共同店は何をしたか。明治40年代に230戸の奥集落は、奨学金制度を設けました。店が生み出す利益で医療に無利子融資制度を設けました。また、その共同店には、電気がなかったため、発電所を利益で造りました。

昭和31年には、道路は通じても車はありませんでした。村のバスを利益からつくりました。奥集落には230戸だけに通じる地域通貨がありました。必要なくなっていけば、普通の通貨に戻る地域通貨です。

沖縄の人たちは、沖縄を平和で語られることを本当はいやだと言っていました。沖縄の心は共同の心だ。その共同の心が集まったときに成せることは大きいといえます。

宮城県丸森町大張地区では、店が消えました。買い物をしたくても、店がない。これからの中山間地には、大いにあり得ることです。町の人に、沖縄の話をしました。すると、1番若い赤ちゃんを抱いたお母さん3人が手を挙げて発言してくれました。

「私たちは今まで1円でも安いところで買い物をしてきました。でも、私たちの村に沖縄のような共同店ができたなら、私も出資します。そして、少し高くても買い続けます。それが貯まって、その利益が、子どもが大きくなる頃に役立つなら、私はそうします」と言いました。区長が300戸の集落を歩き、7割の210人から出資金を募り、協力をしました。大張出身の役場職員は、12人が1万円ずつ出資し、地元の電気店工務店などが10万円ずつ出し、「なんでもや」という地域の皆に応えられる店をつくっています。

黒酢がはやり、おばあさん3人が集まって注文すれば、届きます。それが評判を呼び、定番になったりしています。

昨年12月、1周年祭が開かれ、600人以上人が集まることのない時期に、3500人が集まりました。取引先も100店を超えました。クリスマスケーキを注文すると、なんでもやが窓口になり、クリスマスイブに届きます。今年の正月には、230世帯から刺身の注文があったそうです。子どもたちも自分たちの「なんでもや」を大事にするようになりました。

初年度の売り上げは、3500万円です。人件費を払い、70万円の黒字が出ました。

彼らは、お金ではなく、仲間と時間と空間という3つの間、「さんま」を取り戻せそうだといいました。「なんでもや」が、一番目指しているのは、「村の人たちみんなに、友達がいて、豊かな自然のなかで、せかせかせず、ゆっくり生きられる空間づくり」だと言っています。

東大の財政学専攻の神野直彦さんは、「地域再生の経済学」でスウェーデンに行った際のエピソードを話されました。ストックホルムから100キロ離れた田舎町で、職安の調査の折、たくさんの愚痴を聞いたそうです。「この町は物価が高くてね」と。税金5割の高負担高福祉ですから、当然です。神野さんは、ぼやく町民に「100キロだったら、車でそれほどかからない、ストックホルムに行けばいい。スーパーもあるし、まとめ買いすればいいじゃないか」と言ったそうです。すると、町民は口々にこう答えたそうです。「そんなことをしたら、我が町の商店街が潰れてしまうのではないかと、潰れて困るのは自分たちであり、ここには運転できない子どもやお年寄りも多い」。

流通は、目先の利益、利便性をもとにやってきました。東北の田んぼを潰し、大きな駐車場をつくり、小さな商店がたくさん消えました。私も、それを何とも言えず眺めるしかありませんでしたが、ここにきて少し分かりました。商店もまた大切な我が隣人である、その隣人なくして何が地域なのか、スウェーデンの人たちはそう言っているのだと思います。その隣人の力をどう集め、どうつなぎ、生かしていくのか。可能性は、人の中にあると思います。

目先の利益に走らず、本当の利益とは何なのか、地域の利益とは何なのかを考えたいも

のだと思い、話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

《 略 歴 》

結城 登美雄（ゆうき とみお）氏

民俗研究家。

1945 年生まれ。山形県大江町出身。

山形大学人文学部卒。宮城教育大学、宮城県農業実践大学非常勤講師。

広告デザイン会社経営を経て、東北地方を中心に全国 600 以上の農漁村を歩き、住民との対話を行い各地の民俗や地域資源を掘り起こしながら、地域文化再興に関わる。その活動が評価され、本年 3 月芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）を受賞。

熊本県水俣市の吉本哲朗氏と共に「地域学」を提唱。

著書『山に暮らす海に生きる』（無明舎出版）他。